

8

社会学（社会理論と言っても、だいたい同じ）は、言うまでもなく、社会を記述・説明することを目的とする。

では、社会とはなにか？

社会とは、人間が集まってできている、相互行為の秩序ある全体である。「人間」が集まってできていなかったり、「秩序ある全体」でなかったりするものは、社会とは言わない。

ではこの、人間とはどういうものだろう？

人間を記述するには、正常な状態、すなわち、社会的な環境下で観察しなければならない。人間を社会と切り離して観察することはできないから、社会=Σ人間、という等式は成立しない。社会は、要素的な人間の集合、ではないのである。

このことは、社会の記述を困難にする。社会を記述するためには、人間を記述する必要がある。しかし、人間を記述しようとする、こんどは社会にさし戻されてしまう。

この問題は、社会学における「方法論的個人主義」と「方法論的集団主義」の対立として、気付かれてはきた。けれども、こういう対立それ自身が、社会=Σ人間、という要素還元論的な発想の産物であろう。どうすれば、社会の適切なモデルを構成できるのか、もういちど考え直してみるべきだ。

*

人間をとらえることの困難を、つぎの2点に、整理できよう：

- ①人間は、その環境（社会）と、分離できない。
- ②人間は、非常に複雑な内部構造をそなえていて、その実態がよくわからない。

この2点は、互いに関連しているけれども、いちおう別のことである。

①を、「人間と社会の分離不能性」といおう。これは、たった今のべたことである。それに対して、②を、「精神の高階の複雑性」といおう。このために、人間を観察したり記述したりしようとする、非常に特殊な事情がつけ加わってしまう。

人間は、出来事としてみれば“身体”として存在している。そして、その機能からみるならば、“精神”である。精神は、人間を特徴づける現象であって、身体と表裏一体の関係にある。

ここで「高階」というのは、記述される対象と、記述する手段との複雑性の度合が、格段に異なること（記述される対象のほうが複雑なこと）をいう。あらゆる現象を記述する手段は、（いまのところ）言語である（か、あるいは言語に置き換え可能な記号のシステムである）。ところでこの言語それ自身が、精神機能の産物である。言語は、多くの記号とその相互関係からなるが、その秩序よりも、精神機能の秩序のほうが複雑でないことは

ない。（さもないければ、人間は言語を行使したり理解したりできないだろう。）

ゆえに、言語は、人間（の精神機能）を完全に記述しつくすことはできない。言語よりも、人間のほうが複雑な秩序だからである。可能なのは、言語を通じて人間を「理解」することだけだ。

*

理解は説明と、どう違うのだろうか？

理解とは、単純にいうと、一種の投影である。精神として機能している存在（たぶん人間）があって、別の、やはり精神として機能している（と思われる）ある存在（たぶん人間）の挙動を観察し、自分の同類であるなあ、と判断する。それが理解である。

数列の例が、もっとも単純だった。たとえば、

2, 4, 6, 8, 10

のような数列が記されていれば、つぎは12だな、と誰でも思う。けれども、その根拠を示すことはできない（「理解の蘇生」参照）。

理解は、有限な事象から、規則を洞察することである。規則は、一般的に適用可能なものだから、有限な事象と厳密に対応しはしない。有限な事象⇒規則、の導出が一義的であることは論証できない。理解は、必ず、“飛躍”をとらなう。

別の言い方をすれば、理解は、ゴルフで「OK」を出すのに似ている。つぎの1打でカップ・インすることは、やってみなければわからないわけだが、それをやらずに1打とみなすのが「OK」である。2, 4, 6, 8, 10, ……とつづく数列の、「……」（以下同様）の部分が、それにあたる。この「……」にこめられた内実（わかった！という、理解の実質）は、2~10までの有限な記号列に含まれているのではなくて、理解をしているこの精神（これを書いている私や、読者であるあなたや、……）のはたらきの側にある。

私はたしかに「理解」しているのだが、そのことを論証はできない。論証できないことと、理解していないことは違うのだが、それをことさら混同すると、懐疑論というものになる。

懐疑論は、論証できたことがらを真と認め、そうでない限り確実な知識とは認めない態度をいう。クリプキを先頭とする懐疑論者は、理解の成立が論証できない、ゆえに理解は存在しないと、理解の対象であるルールも存在しないと（ルール懐疑主義）。

けれども、いっぽうで懐疑論は、論証を信頼しなければならない。論証は、理解の対象がそうであるのと同じく、有限な記号列からなる。そしてその有限な記号列が、ほかならぬ「論証」であることは、理解の場合と同様に疑いようであろう。論証を論証たらしめているものは、記号列に含まれているのではなくて、こちら側（精神の働き）に存している。（このことは、キャロルが「不思議の国の論理学」でのべた。）ルールを懐疑すれば、懐疑自身も成立しなくなる。このことは、ヴィトゲンシュタインも指摘している（「確実性

の問題」)。懐疑論は自分の主張を理解できない、倒錯である。

*

ところで、理解の問題と他者問題とは、同型だと考えられる。

他者問題とは、他者が自己と対等に存在することを、どのようにして自己が確信するのか、という問題である。

日常的には、他者の存在は「確実」である。他者は他者として「理解」されている。しかし、そのことは論証できるだろうか。他者は、私と同じ外見をしているだけの、人間によく似たロボットではないのか。他者が他者であるとの知識をエポケー（括弧入れ）し、自己にとって確実なことからその事実を導出しようとして、さまざまな他者論が試みられている。

けれども、懐疑論に立つ限り、他者問題に解決を与えることは困難であろう。

他者が私に示すのは、言語、ならびに行為である。それらは、さっきの数列と同じく、有限の記号列（と同じようなもの）と考えられる。言語や行為（の観察可能な部分）よりも、他者＝精神は、「高階の複雑性」をもっている。したがって、それが、他者＝精神の現れであると確信ということは、自分の精神をそこに投影する以外に可能であるはずがない。これは、他者問題を解こうとする本来の動機を、満足させない。

他者よりも、論証のほうが根本的だと考えるところに、この錯誤がある。フッサールもここで足踏みせざるをえなかった。他者が登場する機制として、「遠心化」を掲げる議論があるが、同じ構造をもっているような気がする。

§

人間と人間の相互関係では、理解が本質的である。

人間と人間とが、言語／記号／行為によって結びついていること、そして、それを互いに理解しながら社会を営んでいること。この事実を疑う必要はない。社会はそうしたものだ。

このような社会を観察しようとする人間は、2通りの異なった態度（方法論）をとりうる。理解と、理論と、である。

理解（understanding）の場合、観察者＝人間は、人間の精神がどのようなものであるかに関して特別の仮定をおかない。自分の精神の働きも、あるがままに認める。社会で成立しているのと同質の理解が、観察者と社会の当事者との間にも成立する。ヴェーバーの理解社会学は、ここまで歩を進めた。

当事者の理解と、観察者の理解が同質であるかに関して、ここでふたたび、懐疑論が頭をもたげるかもしれない。実際、コードの共有を根拠に、理解の同質性を主張しようとしても、コードの共有は論証できない。ただし、だからと言って、ここでもさきと同様、理解が同質でありえない、と一般的に主張できたわけでもないことに注意。（理解が同質でなかった場合＝理解しそこねた場合には、その証拠をあげることができるだろう。）

理解は、正当な方法論だが、これによって、社会の全体について適切な知識をうることはできない。なぜなら、理解は、理解する精神と同型のもの（つまり、1人の人間と同型のもの）しか理解できないから。社会は、複数の人間の集まりであるから、単純な理解の範囲を超えている。

*

これに対して、理論（theory）の場合、観察者＝人間は、人間の精神がどのようなものであるかに関して特別の仮定をおく。そして、自分の精神の働きを、説明の過程から切り離す。

精神現象は複雑だから、それをそのまま認識するなんてできない。精神に関して仮定をおくとは、要するに、それを単純化するということである。精神を、実際より単純なものと想定することで、多くの人間たちの織りなす社会全体について、適切な知識をえようというわけである。

さて、この仮定を単純なものにしすぎると、社会を適切に記述できなくなってしまう。たとえば、近代経済学（ミクロ理論）は、個々人に一価の効用関数（ないし、それと同等の性能をもつ、無差別曲線ないし顕示選好）を仮定した。そして、社会を市場（商品の売買される関係）に限定＝単純化した。その結果、理論は、動力学と同型の首尾一貫したものになったが、そのかわりに理解がどこかにいってしまい、まったくの機械論になってしまった。

構造－機能分析は、個々人（ならびにそれ以外の社会システム）に、多価の機能評価関数を仮定した。そして、社会を、機能を実現するためのシステムに限定＝単純化した。けれども、多価関数による制御は、マルチ・オブティマルな状況（トレード・オフ）をもたらして、首尾一貫しない。機械論が矛盾を含んだのでは、説明理論として失敗である。

そのほかに、ゲーム論の試みもある。これは、個々人に一価の効用関数を仮定し、その価が個々人の相互行為のあり方によって決定される（利得行列）というモデルである。議論としては、首尾一貫しているが、一般的な結論がない。また、理解の契機を欠いた、機械論になっている。

*

機械論であることは、説明理論であるための十分条件である。けれども、機械論でありさえすればよい、というわけではない。個々人が社会を「理解」していることを、モデル化できないか。

ここで、身体の性能をどう見積もるか、考えなければならない。人間が外界を「理解」するとは、眼前の観察可能な刺激に完全にコントロールされてしまわないで、それ以外の要素も織りこんで行為する、ということだからだ。その根拠は、身体（と相関する精神）が、「高階の複雑性」をそなえていることである。

知覚・記憶・想像などとさまざまに呼ばれる精神機能は、総体として、身体（と相関する精神）の内部に、外界を（内的）世界として再構成する能力をもっている。私のなかには、（私の知りえた）すべての他者たちが住んでいる。そして、すべての他者たちのなか

には、(私を含む)彼らのすべての他者たちが住んでいる。われわれは、そうして構成された世界に対して反応=行為するのであり、現前する断片的な刺戟に対してでない。これが、理解ということのいみである。

これを別なふうに言えば、人間は自由である、ということだ。自由の条件は、有限な事例に拘束されないことである。列挙できる有限個のできごとに完全に規定されてしまったら、自由とは言えまい。だから人間は、自分や他者のこれまでの行為や言葉に完璧に拘束されたりせずにふるまう。

この関係を、簡単に表現するのに、有限/無限の対比を用いることができる。有限集合(行為や言語の観察可能な部分)から、無限集合(精神機能)のなかへの、写像を作ることができる。

精神機能に関して、無限を組みこんだ機械的な(=説明的な)モデルを構成したのは、生成文法である。チョムスキーの「能力」概念は、そのような工夫だ。

これは、よくできた説明理論だった。ただし、生成文法では、社会関係のあり方は捨象された。そこでは人間は1人しかいない(speaker=hearer)。そして、理解のモデル化も排除された。言語の意味解釈は、文の生成と切り離され、あとから機械的に構文に押しつけられるのだ。

文が意味解釈される過程が、機械的でありえないこと。少なくとも、適切性条件など、社会的文脈を参照する必要があること。そのような指摘を試みたのが、オースティン以来の発話行為論(speech act theory)である。まことに正当な指摘だった。

言語を実際に行使したり理解したりするのに、言語外的な要因(世界に関する知識)が援用されること。これを詳細にモデル化しようとする、ただ単に有限/無限の対比を持ち込んだだけではすまなくなる。社会的文脈を理解しているところを、どのようにモデル化するかが、ここで焦点となる。

§

言語ゲーム論は、理解を織りこんだ、最単純なモデルである。

言語ゲーム論は、ルールが存在を前提にする。誤解のないように望みたいのは、ルールと身体との関係が、機械的でないことだ。身体(人間)は、ルールに「従う」が、ルールに支配されるわけではない。当事者がそう理解するから、また、観察者=人間がそう理解するから、ルール(にもとづくゲーム)がそこにあるにすぎない。言語ゲームの成立と、理解の成立は相即的である。ゲームは(機械論的に考えれば)不確定であり、したがってダイナミックである。

けれども、言語ゲーム論は、理解のメカニズムについて、何を仮定をおいていない。ただ理解の効果だけを、ルールというかたちで想定しているにすぎない。(それゆえ、最単純な理論である。)

理解のメカニズムに、もっと内容のある仮定をおく議論として、たとえば、状況意味論

(situation semantics)がある。

状況意味論は、状況(自分を含む世界のあり方)を理解する精神の構造(時制、人称構造、格関係、……)について、積極的な仮定をおく。このように認知のあり方のモデルを作ることは、“理解を機械的に処理すること”を目指す、人工知能研究にとって、本質的な作業なのである。

「理解のモデル(理論)を作る」という試みは、背理を含むわけだが、社会学が理論を作ろうとすれば、これ以外にない。もしも完全に機械的なモデル(理論)をこしらえてしまえば、そこには人間の理解とのずれが生ずるだろう。それでも人工知能論は、実用的な機械的モデルを追求するよう運命づけられている。いっぽう社会学は、現実の人間の理解のあり方に照準しつづけるだろう。背中合わせの両者だが、まだまだ協力できる余地も多いはずだ。

*

さて、理解のモデルはほぼ、宇宙(=Σ事実)の縮小写像になっているはずである。しかし、もしも厳密な写像であるならば、理解を独立変数として考慮する意味しなくてもよいわけである。理解は、事実の一部を省略し、事実の一部を変容し、事実の一部を付け加える。そして、「人間が外界を理解している」こと自体が、また事実である。こういう事情を考慮すると、人工知能論の範囲で考えても、理解のモデルを考えるのに、つぎの3つの課題があることになるう：

- ①理解は、外界(=Σ事実)と、どのような対応関係があるか。
- ②理解を遂行する精神は、どのような事実をつけ加えるか。
- ③理解を遂行する精神は、他の精神のなかにどのように登場し、理解されるか。

状況意味論の少し古いバージョンをざっとみた限りでは、①、②の課題は自覚され、よく追究されている。特に②は、態度の問題として、大きな扱いを受けているようだ。いっぽう、③は、どういう扱いを受けているのか、わからない。たぶん、扱いが極めてむずかしいと思われる。

さらに、社会学の範囲で考えると、これに加えて、つぎの課題もある。

- ④理解を遂行する精神が集合した場合、そこにどのような効果が生ずるか。

④が、いわゆる社会的文脈である。認知にとらえられた限りでの社会的文脈は議論されたが、④のようなかたちでの社会的文脈は、論じられていないと思う。

私の予想によると、権力という現象は、④の水準で生ずる。権力を記述・説明する理論を立てるとは、この領域になんらかの仮定を持ちこむ、ということにはほかならない。ここまですべてを準備として、作業を進めたいと思っている。